

『日隆大聖人募縁誌上下』について

三 浦 成 雄

『日隆大聖人募縁誌上下』は、その内題として「本門八品法華宗再興之大導師開基日隆大聖人募縁誌卷之一」と記され、「小弟龍子温日蒼刪訂」とある。

著者の舜龍院日蒼（一七七六一—一八三八）は、天明七年（一七八七）得度以来、松ヶ崎檀林、善性学林に学び一致派教学を修したが文化五年（一八〇八）、兵庫久遠寺常寂光院日韓と法論し帰伏、日隆聖人御聖教を尼崎本興寺に於いて閲覧精読、直ちに布教活動に入り、「弾邪開盲編」、「不受不施対論記」等を著し、文政元年（一八一八）富士重須本門寺の学頭に就いた。しかし日蒼の本門八品宣揚の態度に相容れない富士派本門寺は日蒼を追放、文政四、五年頃「江戸八品講」を組織、在家求道の士を教化し、折伏運動を展開していったのである。

日蒼が徹底した在家布教を展開したのは、宗祖日蓮大聖人五百遠忌奉迎の氣運が高まっていく文政十一年（一八二八）頃からであろうと考えられる。

それは、この年の五月、富士派重須本門寺の学頭職にあったことから、法華宗への帰伏を計ったが不調に終わり、日蒼は本門寺破折の詩を残して江戸へもどり、本所深川の「弘道庵」を基盤にして激しい折伏組織を各所に作っていったのである。

『日隆大聖人募縁誌上下』について

日蒼の在家布教の期間は、天保二年（一八三一）が宗祖日蓮大聖人五百遠忌の聖年であることから見れば、丁度その真只中に在ったことがわかる。

この「募縁誌」は、天保九年一月十三日の著作となっており、五百遠忌を期して展開された布教活動の中でとらえることができよう。それは、内題の「本門八品法華宗再興之大導師」と示されることによってもわかる通り、この遠忌を通して「本門八品正意」を世に広く知らしめる意図をみることが出来る。又、本文が漢文体で書かれていることは、「八品講」講頭の教科書として書かれたもので、各地の講頭は本書を所写してこれを手本とし、宗祖日蓮大聖人と日隆聖人との関連を、本門八品法華宗再興という正法の継承の持つ意義を宣布するためのものであった。次に、日隆聖人伝記の中で、他の伝記と異なる記載について幾つかを列挙してみた。

一、俗姓について

「領_ニ於北越中州_ト居_テ射水郡浅井嶋_ニ」

とあり、他の伝記では父尚儀が越中に於ける支配者として当時の桃井家の位置づけをしているのに対し、その記載はない。

二、誕生について

「以_テ人王二百又二代後小松院御宇至徳元年甲子十月十四日辰刻_ニ于茲_ニ降誕也_」

と、古来の説を伝承している。

三、得度について

「明德元庚午ノ春七歳入学_テ明德四年師ヤ乎御歳十歳四月登_テ于山_ニ奉_テ事_ニ三寶_」・・・五月十日辰刻除_テ於_ニ髮_」・・・
名日立字深田後自_テ改_テ日隆_」

得度は十歳説をとり、深田と同時に日立と号している。

四、遊学について

「應永八^己師乎。御歳十八歳以在^ニ交而俗姓之縁ヲ兼^テ聞^テ于華洛於存道^ニ師上^ト。……喝^ニ公^ニ乃師事焉賜^ニ院^ヲ稱爲^ス于桂林院」十八歳で上洛して妙本寺に日霽を師としたとあり、桂林房と稱したとある。

五、妙本寺の退出について

「應永十二年^{乙未}年。師乎二十才冬十二月初四日霽公化焉妙本寺後實旨月明律師^ト。……與^ニ日存日道日隆及^ヒ日忠^ト諫^ニ曉^テ於^ニ月明^ト髮髮巖然^リ以辞^テ於月明^ト茫茫^ト移^テ。……應永二十五年^{戊辰}冬十月師乎相議以各遁^テ于所縁^ニ而分^テ散^テ於妙蓮寺^ト」

應永二十二年本應寺創立の記載がない。

六、河内巡錫について

「奉^テ於師^ト與赴^テ于河内三井邑乎村氏信法恭敬^シ帰^リ徳建^ニ立^マ一字^ヲ今^ノ本嚴寺是也」
本嚴寺が最初の本門八品道場として位置づけている。

七、尼崎本興寺の創立について

「應永廿七歳師乎御才三十七才為^テ弘通開化赴^テ于西海^ニ攝西尼ヶ崎巽濱治郎五郎家^ニ終改^ニ社地^ヲ作^テ於佛閣^ヲ額^ニ本興寺^ト」

巽の浜、治郎五郎の名前に相違があり、辰巳の浜、次郎五良、二郎五郎等がみえる。

八、桃井元助の叛乱と越中下向について

「老臣元成来^テ西尼崎^ニ取^テ鏡^ヲ手割木像^ト。……父母^ヲ為^テ建^テ精舎^ヲ越中高岡本光寺是也」

『日隆大聖人壽緣誌上下』について

ここでは、應永二十三年説と三十三年説とがあり、本書は三十三年説をとっている。

九、色ヶ浜本隆寺、敦賀本勝寺について

「村民歡喜之餘、改_レ宗建_レ寺供養、額_ニ本隆寺_一……」詠_テ万葉長歌_ヲ今_ノ色ヶ濱_ノ謠是也……蜜宗日照山大勝寺圓海法印也者……蓋_シ難問答和殆_ニ三四夜終_ニ社僧等_ノ屈伏懺悔_ヲ而成弟子_ニ隆尊者憐_レ之_ヲ以賜_ニ正法院日從_ノ名_ヲ改_ニ寺本勝寺_一

十、本應寺と本能寺について

「京洛_ノ信_ト小袖屋宗句也者_ヲ以兼知己故_ニ詣_テ于撰西尼ヶ崎之學室……於_ニ西京聚洛草_ニ創寺_一名_ニ本應寺_一千本朱雀之邊_ニ再可祥……三條四洞院_ニ需_ニ得_テ於四町勝地_一

日隆聖人と小袖屋宗句の二人は旧知の間柄、又宗句と如意土丸を同一人物としても考えられるとしている。

十一、光長寺本果院日朝について

「風聞_{カニク}在駿河國岡宮光長寺徒本果院日朝也者_一

御伝記に「風聞」と記載したものは本書以外にない。

十二、加納法華寺について

「河内加州加納邑_ニ強_ニ化_テ於斯波義盛_ヲ令_ニ授戒_一建_ニ於法華寺_一

斯波義盛の出自については触れていない。

十三、西国弘通について

「嘉吉三年壬戌隆尊者壽曆五十九歲鑑於本縁之應_ヲ発而之_ニ于淡州、釜口妙勝寺_ニ弘法教化_ス寺壇齊_ク授戒_ス宿_テ途攝西兵庫津_ニ契信_ト某法化_ニ乎信_ト士廉直_ニ而正路也師乎賜_ヲ為_ニ正直屋之號_一……寶徳三年辛未師尊御年六十有八泉州堺市

鈔屋某木屋某也者連年信師法流築於本門戒壇額頭本寺令以於師之高弟日淨上人爲住持也……吾隆尊者哉弘法無窮盡就中讚州宇多津本妙寺備中州新庄本隆寺多由緒矣」

西國弘通の順序として、妙勝寺↓頭本寺↓本妙寺↓本隆寺としている。

十四、御尊像の造立について
「享徳二癸酉師平世寿七十歳在尼山本興寺……命于泉之佛工淨傳以令造於影像」
御尊像の材質については記されている。

十五、御入滅について
「大聖人縁記」にのみ榎木とある。

「寛正五甲申隆尊者世寿八十又一歳二月中旬集門弟子……吾没後勿廢爲尔等死身弘法於昼夜学業上廢学業者則廢法也……二月廿四日徒日向慙歎合掌而大曼荼羅薰香揚燭而端座至二十五日辰刻自鳴孤磬揚要品門弟子從之方璣神力偈於如来滅後句亦一磬而紆々緩誦偈意始首題自唱衆亦與之終奄然化」

御入滅の状況が詳しく書かれ、神力別附、結要付囑をもって結ばれている。

以上主な部分について、本書の特徴らしき記載を挙げたが、御伝説記類の系統としては、「開祖德行記試評」（日芳）——「德行講演抄」（日芳）↓「募縁誌（日蒼）」と考えられる。

尚、本文を活字にするに当り、学林講師和田晃尚先生には、原文を忠実におこし、末尾に註を付けて、読み方、意味について考察を加えられ、資料紹介の実を挙げて頂き、誌上を以て感謝する次第である。